

## 新年あけましておめでとうございます。

今年の4月より、「第14代常任指揮者」に就任いたします沖澤のどかです。皆様、どうぞよろしく願いたします。

2023年の京響は年間通して変化に富んだ彩り豊かなプログラムになっています。新年の幕開けは、広上淳一氏の華やかなニューイヤーコンサートで始まり、首席客演指揮者としては最後となるジョン・アクセルロッド氏指揮の定期演奏会、2024年で引退を宣言されている井上道義氏指揮の公演や演奏会形式で上演するR.シュトラウスの「サロメ」、名匠カンブルランのブルックナー等は聞き逃せませんし、私の振る公演では、シーズンオープニングを飾るドイツ王道プログラムはもちろん、実演に触れることの少ないフランス6人組を取り上げる公演や、日本初演となるギョーム・コネソン「コスミック・トリロジー」など、聴きどころをあげるとキリがありません。

また、解説付きの演奏会「オーケストラ・ディスカバリー」シリーズや、0歳から入れるコンサートも充実しています。

4月に私が指揮する定期演奏会では、「モーツァルト」「メンデルスゾーン」「ブラームス」の曲を演奏します。

2015年にドイツへ渡ってすぐにメンデルスゾーン基金の奨学生としてドイツ各地でメンデルスゾーンの軌跡を辿り、さらにライプツィヒでクルト・マズア先生のマスタークラスを受ける機会に恵まれました。それ以来メンデルスゾーンは大事な場面でいつも取り上げています。モーツァルトやメンデルスゾーンは、例えるならその土地の湧き水を味わうように、オーケストラの持っている音色や音の運び、流れ、アンサンブルを知るのにぴったりな作曲家だと感じるため、常任指揮者として初めての演奏会に選びました。

また、ベルリンフィルでキリル・ペトレンコ氏のアシスタントを務める中で最も感銘を受けた演奏の一つに、ブラームスの交響曲があります。その演奏でも取り入れられた、ブラームスが好んだ演奏解釈と言われるマイニンゲンの伝統に則った演奏を試みますので、よく耳にする演奏法との違いにも注目していただきたいです。

私は、指揮者として自分の頭の中の音楽に固執せずに、オーケストラから出てくる音や発想によく耳を傾けること、主観性と客観性を同時に持ちながら、最後は自分の意思を貫くことを常に意識しています。そして、演奏者一人一人の手を離れてオーケストラ全体が一つの生き物のように生命力を持った時、形容し難い大きな喜びを感じます。

また、コロナ禍で無観客演奏を余儀なくされて思い知らされたのは、私たちは舞台上で客席からの大きなエネルギーを受け取っていて、どんな名演でもお客さんの存在が無ければ画竜点睛を欠くということです。会場の一体感も演奏会の魅力の一つです。

いつも京響の演奏会に足を運んで下さる皆様はもちろん、これまでオーケストラの演奏会にご縁のなかった方々にもぜひ会場にお越しいただき、生のオーケストラの演奏の迫力や繊細さ、指揮者や演奏者たちの演奏に込めた情熱を体感いただければと思います。

最後になりますが、本年が皆様にとって幸多き一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

*Nodoka Ohsu*